

思い出のつまった地域、何とかしたい

全国青年ボランティアセンターがある一関市の民青班長、Kくんに、震災直後のようすやボランティア活動への思いを聞きました。

地震から1週間たって、ようやく沿岸部の被災地に行けました。道路の端にはガレキが山積みされ、みわたすかぎり、ほんとにひどい状況でした。むかし、実家から陸前高田市の浜辺まで、自転車で行ったことがあります。そこに、流れついた鉄板を使ってバーベキューをしたり、地元の高校生と仲良くなったり、みんなでモスバーガーに行き行って盛り上がり…。思い出がいっぱいつまった場所でした。それがすべて、流されていました。

僕はこれまで、「人のために何かしたい」とそんなに思わなかった。でも今回は、本当に何とかしたいという気になって、「俺って、こんなところあるんだ」と、ちょっとビックリしています。

3月半ばから、ボランティアをはじめました。5～6隻の船が突っ込んでいたお宅で、みんなで力をあわせて引っぱり出すところから、片付けを始めたそうです。僕が行ったときは、漁具の片付けをしました。もともと、あなご漁の漁具が150あったそうで

すが、一日中探しても、50しか見つけられませんでした。何回も同じお宅に通っているけど、ものすごく労力があるし、ほんの少しずつしか進んでいないように感じてしまいます。でも、いつも「ありがとう」と言われるんです。役に立ててうれしいと思いました。

民青班の仲間もみんなで一緒にボランティアをし、「疲れるけど、心地よい疲れだ」と話しています。これまでメールに返信してくれなかった同盟員が友だちを連れてきたり、弟といっしょにきて民青同盟に迎える経験もありました。

ただ、一関からボランティアに行けるようになったのは、ようやく最近です。地震直後はガソリンがなくなり、ジッとしているしかなかった。被災地に行くために12時間ならんで給油しました。スーパーに3時間ならんで食料を買っていた人もいます。これから支援活動を本格化していければと思います。

明るい校舎へ、窓ガラス掃除

28日は小学校の窓ガラスをふくボランティアをしました。忙しくて掃除できずに新学期を迎えたようです。ガソリンスタンドで働いていた青年が、みんなを指揮。「ピッカ、ピッカじゃないですか!」と、先生が喜んでいました。6年生の子どもからは「ボランティアをやってうれしいこと、大変なことは何ですか」と、インタビューを受けました。

申し込みあいつぐ

- 「ネットで、「一関」「ボランティア」と検索して見つけたので電話しました。僕みたいな初心者でも、参加できますか?」という青年も参加へ。
- 学習院大学の学生が、たまたま知ったセンターへ電話。2人で飛び込み参加することに。

お願い 5月2～5日、人数が急激にふえます。センターの寝具や場所は限られていますので、できるだけテントや寝袋、毛布などお持ちください。